

伊勢物語八五段について

吉 山 裕 樹

伊勢物語八五段は、惟喬親王章段八二・八三段と一連のものとして捉えられるのが普通である。古くは鎌倉期の和歌知識集や冷泉家流の伊勢物語注が、単に「親王」としか記されていない八五段の

「君」を惟喬親王の事として、惟喬親王章段の一段に位置づけており、これは室町期の旧注においても変わらない。江戸期の新注に至っても、たとえば伊勢物語童子問が「惟高となり平のことを物語に作りていはんとする」と述べているように、作り事とはするものの惟喬親王章段の一段と見ることに変化はない。さらに近年になって、窪田空穂氏『伊勢物語評釈』が「この段は、出家後の惟喬親王の後日譚として、物語作者の作爲したものである」と述べ、森本茂氏『伊勢物語全釈』が「この段は、八十三段『小野の雪』の後日譚であろう」と述べているように、時間の流れに即して八三段後半部の惟喬親王出家の後を追った後日譚として読むのが通例となっている。以下、八二、八三、八五段と段を追ってみよう。

むかし、惟喬の親王と申す親王おはしましけり。山崎のあなただに、水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりに
は、その宮へなむおはしましける。その時右馬頭なりける人を

常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねむごころにもせで酒のみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜ごとにおもしろし。その木のもとにおりぬて、枝を折りてかざしにさして、かみなかしもみな歌よみけり。馬頭なりける人のよめる。

世のなかに絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからましとなむよみたりける。また人の歌、

散ればこそいとど桜はめでたけれうき世になにか久しかるべき

とて、その木の下はたちてかへるに、日暮になりぬ。御供なる人酒をもたせて、野より出できたり。この酒を飲みてむとて、よき所をもとめ行くに、天の河といふ所にいたりぬ。親王に馬頭おほみきまゐる。親王ののたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたるを題にて、歌よみて杯はさせ」とのたまうければ、かの馬頭よみて奉りける。

狩り暮らしたなばたつめに宿からむ天の河原に我は来にけり親王歌をかへすがへす誦じ給うて、返しえし給はず。紀有常御供に仕うまつれり。それがかへし、

一とせにひとたび来ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

かへりて宮に入らせ給ひぬ。夜ふくるまで酒飲み物語して、あるじの親王、糸ひて入り給ひなむとす。十一日の月もかくれなむとすれば、かの馬頭のよめる。

あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあらなむ

親王にかはり奉りて、紀有常、

おしなべて峯もたひらになりなむ山の端なくは月もいらじを

(八二段。松尾聰氏・他『校注伊勢物語』による)

都の俗塵を離れて、自然にめぐまれた水無瀬、交野に遊ぶ惟喬親王主従が描かれている。自然志向とともに、「やまと歌にかかれりけり」と、惟喬親王主従を遊宴の場において漢詩ではなく和歌を詠んだ先駆的存在として位置づけ、「かみなかしもみな歌よみけり」と、グループ構成員全員が詠歌のたしなみをもつ風流集団として提示していることが注目される。

むかし、水無瀬にかよひ給ひし惟喬のみこ、れいの狩しにおはします供に馬頭なる翁つかうまつりけり。日ごろへて宮にかへり給うけり。御送りしてとくいなむと思ふに、おほみきたまひ禄賜はむとて、つかはさざりけり。この馬頭心もとながりて、

枕とて草ひき結ぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくに

とよみける。時はやよひのつごもりなりけり。かくしつつまうで仕うまつりけるを、思ひのほかに、御髪おろし給うてけり。

正月にをがみたてまつらむとて、小野にまうでたるに、ひえの山のみもとなれば、雪いとたかし。しひて御室にまうでてをがみたてまつるに、つれづれといものがなしくておはしましければ、やや久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひ出で聞

えけり。さてもさぶらひてしがなと思へど、公事どもありければ、えさぶらはで、夕暮にかへるとて、

忘れては夢かぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとはとてなむ泣く泣く来にける。

(八三段)

まず前半部で馬頭を手離そうとしない親王の姿を描いて、八二段の最後の場面での寝所に入ろうとする親王を引き止めようとした馬頭の姿と対比させて話をつないでいる。ついで後半部において親王の出家と、八二段に見られた風流集団の解体、そして風流の喪失を背後において親王の孤独な姿が描かれる。その姿は、八二段の風流三昧とのあまりの落差に、これが現実であるとなかなか信じられぬ馬頭の「忘れては」の絶唱のうちに結晶化されている。

むかし男ありけり。わらはよりつかうまつりける君、御ぐしおろし給うてけり。む月にはかならずまうでけり。おほやけの宮仕へしければ、常にはえまうでず。されど、もとの心うしなはでまうでけるになむありける。むかし仕うまつりし人、俗なる禪師なる、あまたまゐり集りて、む月なればことだつとて、おほみきたまひけり。雪ごぼすがごと降りて、ひねもすにやます。みな人ゑひて、「雪に降り籠められたり」といふを題にて、うたありけり。

思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞ心わがなるとよめりければ、みこいといたうあはれがり給うて、御ぞぬぎてたまへりけり。

(八五段)

八三段の悲劇的幕切れから数年後の正月(む月にはかならずまうでけり)はそのことを示すものであろう)に昔の臣下が参集しての酒宴といった体裁をとっている。このように八二・八三・八五段と続

けて読んでみると一つの流れをもった話となっているのは明らかである。

二

八二・八三・八五段の流れをもう一度ふりかえってみると、八二段では親王と臣下達の風流な遊宴を通しての交流が描かれ、八三段では親王と馬頭二人に焦点が絞られるとともに、出家によって臣下達から切り離された親王の孤独が浮き彫りにされる。八五段になると、再び昔の臣下達に取り囲まれた親王の姿が描かれ、正月という時に限定されるものの八二段の主従の世界が復活した様相を呈している(八五段の題を設けての詠は八二段の天の河原の題詠が想起される(八五段の題を設けての詠は八二段の天の河原の題詠が想起される)というものであろうし、「みこいといたるあはれがり給うて」というのも八二段の同場面の感に堪えず返歌できなかった親王に通ずるものがある)。すなわち、八三段の親王の孤独を挟んで、八二段と八五段は親王主従のなごやかな交流を描いてシンメトリカルな形を成していると言える。このような形から見ると、惟喬親王章段は八三段後半部の親王出家、そして正月の馬頭の親王訪問を頂点としていと言えよう。八二段はこの八三段後半部の悲劇性(出家にまつわる事情や人間関係の葛藤は物語の表舞台から排除されているので厳密な意味でのドラマは見られないのである)を浮き立たせる役割を、八五段は逆にその悲劇性を薄める働きをしているように見える。その意味で八五段は蛇足の感を与える面がなくならない。

ところで、片桐洋一氏の成立論によれば、八五段は原型章段と見做される八二・八三段(原型は現存の形のままではない)の後を受

けて成立したものと言う(『伊勢物語の研究〔研究篇〕第五篇第一章』)。そうすると、八三段の悲劇で完結していた惟喬親王章段に、後人が後日譚として八五段を書き加えたことになる。八五段の作者をして八五段を書き加えたのは、右に見たように八三段を挟んで八二段と八五段がシンメトリカルな形でバランスをとったようになっていることから考えて、やはり八三段後半部の親王のあまりにも悲しい境遇での幕切れを何とかしたいという思いによるものと思われる。その意味で、後日譚してみると、八五段は親王の魂を慰める鎮魂的な面をもっていると思われる。

三

八五段は右に見たように、八二・八三段の後日譚という側面をもっているのは確かであるが、八二・八三段と異なって「惟喬親王」と「馬頭」(業平)の話でなく、或る「親王」と「男」の話となっているのも確かである。このことについては、阿部俊子氏『伊勢物語全訳注』に「この段の話は、八十三段につづくもので、八十三段の絶唱の余韻を追うて、業平でない『伊勢物語』の作者が、つかず離れずの立場で作り加えたものとみていいのである」と述べてある通りであろう。なぜ「つかず」であり、「離れず」なのかを調べてみる必要があるが、その前に八三段後半部と八五段の関係について少し検討してみたい。

八五段を見ると、一見明らかに八三段後半部に負っているところが多い。たとえば、市原愿氏『伊勢物語生成序説』(第二章第三節)に、

次に「御髪おろし給うてけり」は八十三段のE段（筆者云、八三段後半のこと）と全く同じ表現である。「む月にはかならずまうでけり」や「されど、もとの心うしなはでまうでけるになん有りける」もE段を踏まえた表現であり、「おほやけの宮つかへしければ」もE段の「公事どもありければ」を踏襲したものである。「雪こぼすがごと降りて、ひねもすにやまず」もE段の「雪いと高し」をアレンジしたものに過ぎない。

と指摘してある通りである。このようなところから「どうも二番煎じの感が強い」（森本茂氏『伊勢物語全釈』）とか、「簡潔で詩精神が漲り、抒情豊かな八十三段のE段に比べて、文章が創意と緊迫性に欠け、和歌もまた心の高揚がなく、全体的に散文化していて、原初伊勢物語に見られる詩精神の退潮が感ぜられる」（市原氏・前掲書）といった評価を受けている。こういった評価はおおむね首肯してよいかと思うが、ここで両段に共通する事項についてももう少し掘り下げて比較検討してみよう。

「御ぐしおろし給うてけり」の一致は、惟喬親王出家の後日譚を描くためには、八五段にとっては欠かせない要件であるが、さらに出家して世俗的な力を失った主君に無償の誠意をもって対する男を描くための要件でもある。「む月」という時の設定については、八三段では、華やかなるべき時にもかかわらず閑散とした状況の中での孤独な親王を浮き彫りにし、正月の朝廷の行事ゆえ親王の許にとどまれぬ馬頭に苦衷をもたらずものとなっている。それに対し、八五段では、「む月にはかならずまうでけり」と八三段の後日譚として設定するとともに、「む月なればことだつて、おほみきたまひけり」と八二段の酒宴の復活を描くために選ばとられた時でもある。

次に宮仕えであるが、八三段では「さてもさぶらひてしがなと思へど、公事どもありければ、えさぶらはで」と馬頭にとってのり超えられぬ障害として、物語の悲劇性を際立たせている。ところが、八五段では、

む月にはかならずまうでけり。おほやけの宮仕へしければ、常にはえまうでず。されど、もとの心うしなはでまうでけるになむありける。

という文章の運びを見ると、障害ではあるものの、「もとの心うしなはで」を浮き立たせる働きをしているのである。

最後に「雪」について見ると、八三段では「ひえの山のみもとなれば、雪いとたかし。しひて御室にまうでてをがみたてまつるに」とあるように、親王の住む世界と馬頭の住む世界の境界に聳え立つ障壁のごときものとして存在している。この雪に象徴される住む世界を異にする境界が、馬頭にとってどれ程大きな衝撃であったかは、「忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは」という歌に端的に示されている。それに対し、八五段でも「こぼすがごと」「ひねもす」に降った雪は「雪に降り籠められたり」と言われているように、これまた本来親王と男達の住む世界を分け隔つものである。ところが、ここでは「雪に降り籠められたり」という状況を「思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞわが心なる」（めかれせぬ）については、あなたの側にいられるように、雪が降り積るの意ととる）と、それを本望と詠んでいることから明らかのように、親王と男達を一つの世界に包みこむものとして存在しているのである。

このように、八五段では、八三段に負っている点が多いのも事実

であるが、全て何らかの形で転位・転換されて用いられているのであって、単なる二番煎じと言えぬ面がある。

四

話を「つかず離れず」に戻すと、「つかず」を強く感じさせる要因は、八五段の「わらはよりつかうまつりける君」にあると言えるだろう。これは男が幼少の時から仕えている主君ということであるが、惟喬親王と業平（馬頭）の年令関係は業平が十九歳年長であって、史実と合わぬことがまさに「つかず」と思わせるわけである。このあたりについて、諸注を参看すると、

惟喬の御としよりは業平は廿ばかりまされば、「わらはより」といへるはたがへど、物語の中にさることすくなからねば是のみとがむべからず。〔勢語臆断〕

惟高となり平のことを物語に作りはいはんとするが故に、年数も書まざらばし、たがひ有ことをあらはし、惟高・業平にあらざる一術の筆力をしらざる故に妄説邪説も出来るべし。〔伊勢物語童子問〕

。此みこは業平朝臣よりは御歳おとりたまへば、業平の「わらはより」と云事いかゞなるやうに思ひもいひもするは中々にいかゞ。つくり物語なるにさばかりのたがひなどがむべき事かは。〔伊勢物語新釈〕

。事の真相を知りたい人は、別に正史があるのだ。何人も知っている事実を、わざと顛倒させて、或は滑稽に或はあはれに、いはゆる詞花言葉の巧みを弄して、世人の慰みに供するのが物語

の目的である。この物語は業平の時代から、あまり遠く隔たらぬ時の作であるによって、事実を直写しては不都合であるのだ。〔評釈伊勢物語大成〕

といった見解が見られる。『勢語臆断』『伊勢物語新釈』は物語ゆえの筆法で「とがむ」ことではないという程度でとどめているが、『伊勢物語童子問』や『評釈伊勢物語大成』は物語の虚構性を積極的に捉えてゆこうという姿勢である。ただ、この史実に「つかず」を描く理由について、八五段に即して説明したものはないようである。

さて、八五段は「惟喬」と「業平」（馬頭）という固有名詞を取りはずした形で描かれている。先に見たように、八五段は八二・八三段の後日譚の色彩を濃厚にもっており、そうすると「惟喬」「業平」の物語として描いた方がよいようにも思える。そうならなかったのは、そこに何らかの事情が働いていたと考えられ、また或る「親王」と「男」の話として描いてあることと、右の年令関係に見られる「虚構」との間には関連があるように思われる。

ここで、この八五段の主題を考えてみると、それは「されど、もとの心うしなはでまうでけるになむありける」の「もとの心」にあると見てよからう。出家して世俗の権力を喪失した親王に、男は無償の誠意をもって仕え、「思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞわが心なる」と、その「心」を歌に表出する。親王はその「心」に強く感じ入り、「御ぞぬぎてたまへりけり」と報いる。

このあたりいささか教訓臭が感ぜられなくもないが、主題による物語構成の統一は明白である。この八五段の男の誠意は、八三段後半部の高く積った雪を「しひて」踏み分けて惟喬親王を訪れた馬頭の

誠意を受けてのものであるが、八五段ではそれを物語の中心において主題としているわけである。この八五段が八二・八三段と同様、惟喬親王と業平（馬頭）の話となっていたら、この主題はどうなるであろうか。惟喬と業平は有常・静子兄妹を介して親族関係にあり、親族関係にあるということになると「もとの心」をもって仕えるのは当然のこととなってしまふ。「もとの心」という主題は親族関係の中で霧散してしまふのである。それゆゑこの主題を生かすために、八五段は惟喬・業平という固有名詞を脱した形で描かれることになったと考えられる。ただ、或る親王と男の話になると、どうして男が出家した親王にここまで誠心誠意仕えるのか、という疑問も生じてこよう。そこで、男と親王の親密な関係を保証するものとして、「わらはよりつかうまつる君」という設定が用意されたのであろう。物事の判断も十分でない幼少の時から仕えていたからこそ、理屈を超えて「もとの心」を失わないで仕えようとするわけである。

五

八五段は、右に見てきたように、八二・八三段の後を受けて一時的にせよ主従の風雅な交わりが復活したかのごとき体裁をとって後日譚として物語るとともに、一方で仕えていた主君の出家という状況の変化にもかかわらず変わらぬ「もとの心」という主題を提示するという、二つの意図をもってまとめられた章段と考えられる。惟喬親王の物語としては、内容から見て八二・八三段で完結していると思われるが、八五段がその後を次いで明確な主題を打ち出して締

めくくっていることは、やはり伊勢物語の教育書の側面と関わっていることであると思われる。片桐洋一氏『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語』には、『伊勢物語』の本質を、若年の成年式に臨んでみずからの経験を語り聞かせる翁の回想述懐の態度と成年成女を前にしての翁の対立意識の融合としてとらえようとされた折口信夫博士に賛意を表されているが、八五段の教訓性はこのような伊勢物語の性格の端的な表われと見てよいであらう。

かように、八五段は惟喬親王章段八二・八三段を受けてまさに「つかず離れず」ながら、教育書の意識のもとに一つの方向性をもってまとめあげられものと思われるのである。